

鳶の森の特色

日本のブナ林の減少

古来より、ブナの森は北日本の山岳地帯の大部分を覆ってきました。しかし、従来ブナは成長が遅く、切り出した木材の劣化が早いことから、建築材としては使い物にならないとされてきました。従って、広大なブナ林が伐採され、かわりにスギが植林されました。現在、日本に残るブナ林のほとんどは、白神山地や八甲田山地といった人里離れた、あるいは容易にたどり着けない場所にあります。

稀有な再生の歴史

鳶地域では、いくつかの要因が重なってブナ林が再生されました。この地域の気候は、昔の耕作手法からすると、低地での農業には寒すぎました。農家はかわりに牛や馬の飼育に注力しました。20世紀初頭、耕地の大部分が日本軍に買収されると、地元の農民は家畜を鳶や付近の八甲田の山中に移動させなければなりませんでした。家畜は主にササ（茎が細く葉が大きい dwarf bamboo の一種）を食みました。これによって林床の風通しがよくなり、ブナの苗木が育ちやすくなりました。また、森へのアクセスもよくなり、人々が薪や炭を作るために木を伐ることができるようになりました。この、林床に日光が届くように木を伐り、使えない木はそのままにしておくといった森林管理は、1960年代まで続きました。現在、鳶の森は、人間の干渉によってブナの再生と存続が自然に行われる環境が作り上げられた稀有な例となっています。

[ボックス]

名前の由来

ブナの木は建築資材には適さず、主に薪や炭に使われました。日の光の差すところで生育する鳶は、木が伐られたことによって木が少なくなった部分に繁茂するようになりました。かつては今よりもこの地域にたくさん茂っていたこれらの鳶が、おそらく鳶の森という名前の由来となったのでしょう。